

## やさしさが時にあだになるの巻

だいじなことなので何回も載せていきます。医療におけるバッドニュースとして引き合いに出される「がん告知」。今では患者さんご本人にはきちんと説明するのが基本です。インフォームドコンセントの観点からも当然のこととされています。しかし患者さんがご高齢だったり弱っておられたりすると、事情は異なります。それはご家族からの「本人には言わないでください」という思いやりです。

現場でよくみられるのが、医者が家族だけ呼び出し、「かくかくしかじかで、お母さんの（お父さんの）病気はかなり進んでいます。」としたうえで、「これをご本人にもお話ししていいですか」と自分から聞いてしまうという失敗です。反論があると思うのであえて言い切りますが、これは医者としては失敗なのです。本人の可能性を勝手に否定し、意思決定の責任を家族に負わせていることに加えて、そのあとの口裏合わせを自分以外のスタッフにも負担させることになるから、三重の意味でいかんのです。

しかもこの場合、ご家族の希望はほぼ例外なく「母（父）は気が弱いんです。がんなんて知らせたらどんなに希望を失ってしまうかわからない。だから言わないでください。」です。家族はそれでホッとします。願いを聞いてくれていい先生だ。なるほどその場はそれで済むでしょう。たいへんなのはそのあとです。認知症もなく、そう簡単に意識を失うわけではないお母（父）さんのところには、いつまでたっても自分の見通しを知らされず、病状が悪化しても逃げ腰でごまかされて過ごす羽目になります。「おかしいな、おかしいな」と思いながらも自分からは怖くて聞けないまま、疑心暗鬼もつります。「知る権利」どころの話ではありません。

この、「自分だったら告知して欲しいのに、家族（親）には知ってほしくない」という人間の二面性、ダブルスタンダードのおかしさに気付いてほしい。動機としての「やさしさ」は否定できません。ただ、その人が告知のストレスに「耐えられる」って一体どういうことなのでしょう。平気でいられる人などいるのでしょうか？ではもし平気そうに見えたらもう OK なのか？逆に耐えられないとして、その「耐えられない」とは具体的にどういう反応のことを言っているのか？淡々としていけばセーフで、取り乱したらアウトなのか？そんな時はいちど、「私の親はそんなに弱っちい人なのか？」と自分の胸に手を当てて聞いてみてほしい。親のためと言いながら本当は、親の辛そうな姿に向き合う「自分が」辛くなるのを避けようとして、口止めしたいのではありませんか？

またときには、「今は言えないけど、いつか頃合いを見て話せばいい」と先送りの希望がでることがあります。じゃあ、いつなのか？既に状況が悪いからこそ「今は言わずに」と言っ

ているのに、もっと悪くなってから「実は・・・」なんてだれが言い出せるというのでしょうか？「今」言えない嫌なことは、時間がたてばもっともっと言えなくなるに決まっているのです。ここ、意外と大事なところですよ。

思い起こせば 2011 年の原発事故の直後、当時の政府は「本当のことを国民に知らせたらパニックになるから伏せておく」ことにしたと聞いたことがあります。その時、私自身は国民として「ひどくバカにされた」と思いました。税金は取るくせに大人扱いされていないのかと。もちろんこれは私個人の感想に過ぎませんし、大騒ぎして死人が出て責任の取りようがありません。ましてや権利の行使が常に最高の価値だとも思わない。当然ながら、告知することが常に正しくて、いい結果だけを生むわけではありません。だって最初から悪い知らせなのですし、その状況は様々です。

でも、ネガティブな反応を恐れるあまり、本人を蚊帳の外においたまま、周囲がよく考えもせず「うっかり」真実を言わないと決めてしまうことには警鐘を鳴らしたい。大事なものは、誰のための、何のための告知なのかという目的です。それは、最低限の自律・自尊心の確保です。自分の問題について周囲の人に嘘をつきとおされる人に尊厳などあるのでしょうか？自分のことに悩むことさえ許されないなんてあんまりではないですか？誰しも重い病名を告げられれば、こころ穏やかではられません。体験した人からは「頭が真っ白になって」その後の説明をよく思い出せない、ということをよく耳にします。

また、治療が進歩して生存期間が長くなった分、一旦良くなっても転移・再発を経験する機会も多くなります。その場合の告知は、むしろ初めて病名を聞いた時よりもショックが大きいかとも言われます。そしてもう一つ大事なことは、病名そのものの告知と、その病状から予想される先行きの予測は分けて考えなければならないということです。同じ病名でも、それが早期がんであれば高い確率で完治が期待できます。命の心配が要らないということです。それに対して進行がんは進んでいるほど予測は悲観的なものになりやすい。しかしです。例えば同じ stage IV であっても、そこからの未来は誰にも正確に予想できません。未来のことは断定できないし可能性は無限です。なので、医者から見て十中八九、余命が短いと思われても、それは決して断言できません。医者は予言者ではないから。

よって、悲観一辺倒の予想を押し付けることにはマイナス面が大きいのです。だから、現状の事実と、予想は分けて伝えなければならない。現状の事実が重く困難であっても、それはきちんと本人に伝えることが原則だと思います。でも「もう無理」とか「やりようがない」といった価値判断は、「だからすぐ死ぬ」といった短絡的な印象だけを植え付けてしまうことになります。それでは希望も何もあったものではありません。なんとなくわかりますか？バッドニュースを伝えることは嫌な役割ですが、まずは医者の仕事です。正しい情報は

きちんと伝える。しかしそれと同時にそこからくる「二次災害」どれだけ軽減し、人生を豊かにする選択へつなげていくかというのが、多職種によるチーム医療の目指す方向です。ともすれば、それほど緊急ではない物事でも、医者に迫られると、慌てて今すぐ決めなくてはならない気がしてしまうことも多いと思います。

入院や、重い病気の知らせなど、未経験な状況に浮足立つ患者さんやご家族に、ひと呼吸置いて熟慮を求めることも医療者の仕事のうちです。もし「お母さん(お父さん)に告知していいですか？」と聞いてくる医者に出会ったら、「今すぐ決めなくてはなりませんか？」そして、「先生から上手に伝えてほしいのですが。」そうお願いしてみることをお勧めします。様々な経験からのご意見はあると思いますが、いかがでしょうか。